

緑雨・女性憎悪のアフォリズム

— 兆民訳「情海」・秋水訳「情海一瀾」・鷗外訳「毒舌」に見る、

西洋アフォリズムとの交差 —

塚 本 章 子

はじめに

斎藤緑雨は江戸文芸との繋がりの中に位置付けられることが多く、明治に流入してきた西洋文学の影響とは無縁のところまで語られてきた。だが緑雨もまた、ある時期に、西洋文学との接触を持ち、何かを吸収していたのではなかったか。

これまでも、緑雨の言葉の中に西洋の匂いを感じ取れることを指摘した論がないわけではない。河盛好蔵氏は、緑雨のアフォリズムについて、「緑雨の言葉のなかには、フランスのサロンなどに持ち出したら、人びとの喝采を博したであろうようなエスプリに富んだものが少なくない。」と述べ、緑雨のアフォリズムに西洋の匂いを鋭く嗅ぎ取っている。小稿は、河盛氏のこの直感的な指摘に、一つの論拠を与えることになるだろう。

私は、緑雨と幸徳秋水との関係にその手がかりを見る。明治三一

年二月、緑雨は「萬朝報」の社員として筆を執っていたが、そこに秋水が入社してくる。以後二人は交友を深め、秋水は緑雨が最も心を許した友の一人となる。やがて秋水は、死の床に伏してなお貧苦にあえぐ緑雨に、最期まで経済的な支援を与え続けることになる。そしてこの二人の交友が、こういった日常生活の次元にとどまらず、例えば日露戦争に対する「非戦」といった思想的側面にまで及ぶ深さを持つていたことは、以前に述べたところである。さらに、この両者の関係は、アフォリズムという文芸的側面にも及んでいるのである。

秋水が入社した頃、緑雨は「萬朝報」に「眼前口頭」(明三一・一〜三一・三)を連載していた。その約一年後、明治三三年三月、「眼前口頭」は、女性について述べられたアフォリズムの過激さによって、発禁処分を受ける。この女性憎悪の言葉は、これまで緑雨自身の女性不信にその原因を求められることが多かった。だが、そ

これまでの緑雨の言葉の中にも、女性嫌いを感ぜさせる言葉があるとしても、「眼前口頭」の女性に関するアフォリズムは、やはりあまりに激しく、異様である。この激しさは、一体どこからもたらされているのか。

私はここに、秋水と、その師中江兆民が翻訳した西洋アフォリズムの影を見たいのである。秋水は、「情海一瀾」(「自由新聞」明二七・四〇五)と題し、西洋の女性憎悪のアフォリズムを翻訳していた。この「情海一瀾」は、後にも述べるが、兆民の「情海」(「立憲自由新聞」・「民権新聞」・「兆民文集」明二四・三・一五〇六・一)の継続を意図して書かれたものである。「情海」もまた、西洋の女性憎悪のアフォリズムの翻訳であった。

アフォリズムを書いているただなかにあった緑雨と、かつてアフォリズムを翻訳していた秋水とが出会い、交友を深めていくなかで、緑雨が、秋水訳「情海一瀾」や兆民訳「情海」を目にした可能性はある。

緑雨の女性憎悪のアフォリズムには、秋水、兆民の翻訳を通して、西洋の女性憎悪のアフォリズムの言葉が入り込んでいるのではないか。

そしてここに併せて、「三人冗語」として緑雨と共に批評活動を行い、交友のあった森鷗外の翻訳、「毒舌」(「朝野新聞」明二四・三・二四、二七に「鷗外漁史鈔」として掲載、「婦女雜誌」同・六・

一〇に再掲、後「かげ草」明三〇・五春陽堂に収録。)の、女性憎悪のアフォリズムとの関連についても考えることが出来よう。

小稿では、緑雨のアフォリズムと秋水訳「情海一瀾」のアフォリズムとの関連を糸口とし、さらに兆民訳「情海」、鷗外訳「毒舌」のアフォリズムとの関連も絡めて、緑雨の西洋アフォリズムとの繋がりを検証する。そして同時に、緑雨、秋水、鷗外が、西洋の女性憎悪のアフォリズムから、それぞれ何を展開していったのか、あるいは展開し得なかったのかということについても考えてみたい。

緑雨の「眼前口頭」と、秋水訳「情海一瀾」とを対比し、類似するアフォリズムを挙げてみたい。(以下傍線は私に付す。)

○ 狗と女 露西亜

狗兎も婦人よりは賢なり其主を吠えざればなり。

(「情海一瀾」)

○ 彼の妻を見よ、飼犬を見よ、大差ありや。餌を与ふること忘れずバ、吠ゆることなし。

(「眼前口頭」)

どちらのアフォリズムにおいても、女性が犬と比べられており、女性への軽視や、からかいかいが見て取れる。なお、「情海一瀾」には、女性を犬に見立てた文章がこの例の直前にも見られるので挙げておく。

○ 演説 ジョンソン

婦人の演説は例へば狗児の後足にて歩するが如し、為して巧なる能はず然れども人は兎に角其為し得たるを以て驚歎す。

この文章もやはり、女性を挪揄したものである。では、次の類似を挙げる。

○ 啼泣 ソクラテス

婦人の啼泣を信する莫れ其欲するまゝに啼泣するを得る是れ婦人の天性なればなり。

(「情海一瀾」)

○ 涙以外に何物をも有せず、女の涙ハ技術なり。

(「眼前口頭」)

ここでは、双方ともに、女性の涙を信用できないものと捉えてゐる。もう一つ、類似する箇所を挙げる。

○ 嫉妬 独逸

嫉妬なき所には恋愛なし。

(「情海一瀾」)

○ 恋ハ親切を以て成立す、引力也。不親切を以て持続す、弾力なり。疑惑ハ恋の要件也。

(「眼前口頭」)

ここでは、どちらも、嫉妬や疑いが恋にとって不可欠なものとなつてゐることを指摘してゐる。

このように、緑雨「眼前口頭」と秋水訳「情海一瀾」のアフォリズムには、類似する表現が見られる。緑雨のアフォリズムには、秋水の訳した西洋アフォリズムの言葉が入り込んでゐるのである。

この秋水の「情海一瀾」の冒頭には、「兆民翁嘗て立憲自由の紙

上に本欄を設けて謂ゆる情海の千波萬瀾、筆に隨て訳出す、七穿八透人をして情に堪へざらしむ、今其嘯に倣ふ、統貂の嘲は豎子の甘ずる所なり。」と記されている。つまり、「情海一瀾」は、兆民の「情海」の統編を意図して記されたのである。

この兆民訳「情海」のアフォリズムと、緑雨「眼前口頭」のアフォリズムとの間にも類似が見られる。次に対比する。

○ 虚言 バイロン

婦人の虚言ほど可憐なるものは有らず、余は虚口を以て婦人の心術的唯一の裝飾なりと思量す。

(「情海」)

○ たま／＼女の偽りを陳することありとも、たゞす勿れ、責むる勿れ。とがむる勿れ、偽りかあらぬかをさへ、問ふに及ばず。女の嘘ハ、唯聞いて置けば宜き事也。

(「眼前口頭」)

どちらも、女性の嘘を軽いものとして、適当にあしらつておけばよいというのである。次の類似を見る。

○ 形軀 ジュールサンドー

総ての婦人が一種奇妙なる道德を持って、彼等は口頭の契約には少しも重きを置かず、彼等は身体を明渡したる後ならでは契約を為したりとは思惟せず、然ども深く其故を考ふれば洵に当然の事なり、何となれば、彼等の身体は即ち精神にて、吾人の如く身体以外の精神は所有せざるが故なり

(「情海」)

○ ふたりが恋の契約書にありてハ、肉交ハ證券印紙なり。之を

貼用するにあらざれば、自己も猶効力を認めず。(眼前口頭)
ここでは、双方とも、「契約」という言葉を用いながら、恋において身体的関係が優先されている風潮を皮肉っている。他の例も、挙げておきたい。

○ 相見あひまざること久し ロージフコール

通常の恋は相見あひまざること久しければ漸々薄くなるも。最高点のものは相見あひまざれば反て益々熾んになるものなり。蠟燭の火は風の為に滅え。火事の火は風の為に広がる (情海)

○ 相見あひまバ恋ハ止むべきか、相逢はバ恋ハ止むべきか、相語らバ恋ハ止むべきか。切に求めて休むことなきものハ恋也。(眼前口頭)

ここでは、求めて止むことのない恋の激しさを捉えている。もう一例挙げる。

○ 涙 セリユース

婦人の涙は其弱点に調味する一種の香料なり。(情海)
○ 涙以外に何物をも有せず、女の涙ハ技術なり。(眼前口頭)

秋水訳「情海一瀾」との対比でも挙げたが、この兆民訳「情海」でも、女性の涙が装飾的なものとして捉えられている。

このように、緑雨のアフォリズムには、兆民訳「情海」の言葉も入り込んでいるのである。

以上見てきたように、緑雨は、秋水訳「情海一瀾」や、秋水が引き継いだという兆民訳「情海」の、翻訳された西洋アフォリズムの言葉を借りながら、女性や恋を風刺したアフォリズムを作り上げているのである。

二

緑雨にとつて秋水との関係は、アフォリズムという文芸面においても重要なものであった。緑雨が、「朝寝髪」(読売新聞) 明三二・九・五(一)、「わたし舟」(太平洋) 明三二・一(二)といったあたりを最後に、小説から離れ、アフォリズムへと表現形式を転換させていくなかで、秋水は大きなヒントを与えていたと考えられる。緑雨が鋭い風刺精神を持ち、女性に対する風刺の言葉を得、その結果、「眼前口頭」が発禁処分を受けるに至った陰には、秋水、そして兆民の言葉の存在というものもあったのである。

緑雨と秋水は、女性憎悪のアフォリズムという共通する地点を持つ。だがそれは、一体何だったのだろうか。

女性憎悪というモチーフは、西洋ではミソギユニアと呼ばれ、古代ギリシャ・ローマ文学からあった。そして、一九世紀後半のイギリスやフランスでは、フェミニズム運動が隆盛し、離婚法の成立、妻の財産権の確立、選挙権の獲得、女性の高等教育の拡大といったことが起こり、従来の女性像や結婚観の転換がなされていくのである。

る。⁷⁾ こういった時代の中で、女性や恋や結婚を風刺するアフォリズムが、多数見られるようになったと考えられる。

日本においても、明治の前半は、女権運動が起こり、女子教育が奨励され、恋愛神聖論が隆盛し、「家」から「家庭」という転換が試みられるなど、女性像や結婚観が大きく変容した時期であり、こういったアフォリズムが受け入れられる土壌があったのである。

社会風刺というものがなされていくとき、その原初的な段階において、女性是最も手近で安全な対象としてある。秋水と緑雨は、そこから、どのように展開していくのだろうか。緑雨については後に述べるとして、まず秋水について少し触れてみたい。

秋水の風刺、批判精神は、女性という対象を離れ、政治批判、社会批判へと向かう。秋水は、日露戦争への「非戦」を訴えた論説の一つ「吾人は飽くまでも戦争を非認す」〔平民新聞〕明三七・一・一七)の冒頭に、次のような、ヴォルテール、エラスムス、ルーテルの「非戦」のアフォリズムを置いている。

凡ての時と所とに於ける凡ての罪惡を集むるとも決して一の野戦に依りて生ずる害惡に過ぐることなし(ヴォルテール)。

戦争は人間の財産及び身体に關してよりも人間の道徳に關して更に大なる害惡を為す(エラスムス)。

大砲と火器は残忍にして嫌惡すべき器械なり、予は信ず、是れ惡魔の直接の勸奨に依りて生ずる者なるを(ルーテル)。

短い言葉で述べられたアフォリズムの言葉は、後に続く論説本文の言葉を端的に要約しつつ、強いインパクトを読む者に与えている。

同時に、秋水は自分でもアフォリズムを作つて、「撃石火」と題し、明治三六年一月一日から明治三八年九月一〇日まで、「平民新聞」及び「直言」に連載している。ここには、戦争の虚偽をあくような言葉が並んでいる。一連の箇所を引用してみる。

徴兵猶予

従軍者を送つて万歳を歡呼するの人は、曾て其子の徴兵猶予を希ふて、官立学校に入らしめたるの人也。

提灯行列

提灯行列と、煙草屋の行列と甚だ相似たることを怪しむを已めよ、同じく是れ広告の爲めに非ず、同じく是れ利益の爲めなりといへり。

神祐あり

吾人は日本政府が、何故に陸海軍を派出せるやを怪しむ、新聞紙伝ふる所に依れば、日本には神祐あり、神風曾て戦ひたりき、今は守護札戦へり、八幡の鳩戦へり、追々稲荷の狐、大黒の鼠、金比羅の天狗、弁天の蛇を出して戦はしむ可し、何ぞ陸海軍を要せん。

〔平民新聞〕明三七・一・二二)

これらは、現実社会の矛盾を鋭く切り取り、日露戦争の虚偽を指

摘したアフォリズムである。現実の矛盾を、瞬間的に鋭く言い当ててみせる表現として、アフォリズムは有効である。

秋水の風刺精神は、このように、イデオロギーや政治という対象に向かつて直進していく。だがその分、秋水のアフォリズムには、緑雨のアフォリズムに見られるような、市井に生きる人々の滑稽や笑いとといった芳醇¹⁰さはあまり感じられない。

秋水もまた、このようにアフォリズムという表現形式と関わり、自己の思想を表現する手段の一つとしていたのである。そして、その執筆期間は、緑雨が、同じ「平民新聞」紙上において「も、はがき」(明三六・一一・二二―三七・一・三)を連載していた時期から、明治三七年四月に没した後しばらくの期間に該当する。

緑雨と秋水、この両者は、アフォリズムという文芸的側面においても、相互に併走していたのである。

では、緑雨の風刺精神は、どのように展開していくのだろうか。そのことについて考える前に、ここで一旦、緑雨の女性憎悪のアフォリズムと、鷗外訳の女性を風刺した西洋アフォリズムとの関連について見えておきたい。

三

緑雨は、森鷗外とも、「しがらみ草紙」や「めさまし草」などで共に批評活動を行い、交友を持った。鷗外もまた、「毒舌」で、女性

を風刺した西洋アフォリズムを翻訳している。そしてここにも、緑雨「眼前口頭」のアフォリズムとの類似を感じさせるものがある。¹¹次に対比する。

○ 目は魂の窓にして、道ならぬ恋の裏門なり。

Ch de la Ferrère. (「毒舌」)

○ 何故に女子ハ貞淑ならざる可らざるか。何故に女子をして貞淑ならしめざる可らざるか。女子に操ありと信ずる者ハ、自己の零落を知らざる者也。相携へて途上を行くとせよ、妻の眼の何ものに注がれ、妻の眼に何もの、映れるかを、夫ハ察知するの能力なき者也。況んや抑制をや。能力と言はざる迄も、妻が夜毎の夢の始終を、明かに聴く可き信用だに無き者也。

(「眼前口頭」)

ここでは、どちらも女性の「目(眼)」をとらえ、道ならぬ恋を秘めた姿を描いている。もう一例挙げる。

○ 来しかたをも思はず、行末をも思はぬ思は恋のみなり。

Bibac. (「毒舌」)

○ 相見バ恋ハ止むべきか、相逢はバ恋ハ止むべきか、相語らバ恋ハ止むべきか。切に求めて休むことなきものハ恋也。

(「眼前口頭」)

この緑雨のアフォリズムは前のところで「情海」とも対比したものが、ここでも、どちらも恋の激しさを描いたものとして取り上

げておきたい。

このように、緑雨のアフォリズムは、鷗外の「毒舌」とも、接点を持っているのである。

この「毒舌」が訳出された背景については、「鷗外全集」第二二巻（一九七三・八岩波書店）「後期」にも記されているが、以下のような事情があった。明治二四年三月二四日の『朝野新聞』「社告」には、次のように書かれている。

マツタ^{マツタ}鷗外漁史は、来月中旬より高尚優美東洋人の未だ味はざる／独逸滑稽小説／を訳出して読者を絶倒せしめんとて今はやその起稿中なり用心して顎を外さぬ様予め警報をお伝へ申す所なり而して先づ其前駆として取り敢へず／毒舌／てふ漫録をば本日の紙上に掲げたり

「鷗外の「毒舌」という女性憎悪のアフォリズムの訳出は、「独逸滑稽小説」の訳出を模索する中で行われたものであった。

だが、「独逸滑稽小説」は、その後も遅れ続ける。四月一六日の同新聞の「社告」には、

独逸滑稽小説／小説の泰斗森鷗外大人の筆になる盜賊修行（本注・梅花道人作）に繼て本紙に掲ぐる所のものなり作者自ら謂ふ是れ本邦人の夢想だも及ばざる西洋滑稽の訳述なりと大人の手並みは人已に知る効能の程は更にも言はざるべし

と再び掲載が予告される。梅花道人の「盜賊修行」は、四月二二日

から五月五日まで、一回で完結している。だが、五月八日には、「然れども鷗外漁史の滑稽小説は機もあらば、切て出て我朝野新聞紙上に南面して孤と称せんと待ち搦へり、」という「社告」が載せられ、「独逸滑稽小説」は登場していない。そして、九日にも同文の「社告」が載るのであるが、「独逸滑稽小説」は遂に紙面に登場しなかつたようである。

鷗外訳「毒舌」という、女性憎悪のアフォリズムの訳出は、鷗外が「笑い」の文字を模索する中で行われたものであった。だが、「独逸滑稽小説」は、遂に紙面に登場しなかつた。鷗外は、「笑い」の文字を翻訳しようしていたが、できなかつたのである。そして鷗外において、「笑い」の文字の模索は、模索のまま終わつたのではなかつたか。

明治二〇年代後半から三〇年代の終わり頃にかけて、モリエールの喜劇が多数翻訳されている。¹⁰だが、日本の近代文学の土壌に、「笑い」の文学や「喜劇」といったものが深く根を下ろすことはなかつたといつてよいだろう。

四

では、緑雨の風刺精神は、どこへ向かつたのだろうか。それは、秋水のように特定のイデオロギーや政治批判へと突き進んでいくこともなかつたし、鷗外のように「滑稽小説」を模索していくことも

なかった。緑雨は、ただひたすらに、世の中の風潮を、茶化し、皮肉り、嘲笑していく地点に、そしてアフォリズムという短小な表現形式そのものに、とどまり続けたのである。

兆民訳「情海」・秋水訳「情海一瀾」・鷗外訳「毒舌」には、ローシフコール（「情海」）、ロシフコールト（「情海一瀾」）、「Rochefoucauld（毒舌）」という名、すなわち、ラ・ロシュフコーの名が多く見られる。緑雨が進もうとした道の果てに、ラ・ロシュフコーのような文芸世界を思い描いてみることも出来るのではあるまいか。¹³

そしてまた、先程緑雨のアフォリズムと西洋アフォリズムとを対比検証した箇所、バイロン（「情海」）、Balzac（「毒舌」）といった、一九世紀にイギリスやフランスなどで大きな流行となっていた「ダンディズム」に関わりがあるとされる作家や画家たちの名前が挙がっていた事を想起したい。バイロンはダンディーとして人気を博し、バルザックは若い頃はダンディーを目指すも体重増加で断念、小説の人物にダンディーを創出した。「情海」、「情海一瀾」、「毒舌」には、対比した箇所以外にも、バイロン、バルザックの名が多く見られる。特に、バイロンの名は多い。他にも、対比の中では取り上げなかったが、「情海」には、スタンダール、アルフレトミュセーという名も挙がっている。スタンダールも、作品の中に数々の「ダンディー」を創出し、ミュッセも当時有名なダンディーであつ

た。緑雨は、西洋の「ダンディズム」と交差し、その空気を、間接的にはあるが呼吸していたのである。

河盛好藏氏は、緑雨について、

私たちは彼のダンディズムを見落してはならない。フランスには、大した作品を残さなかったがエスプリの利いたアフォリズムやボン・モによって文壇や社交界に名を売った文士が少なくない。緑雨ももしフランスに生まれていたら、彼の才能はもっと高く評価されたにちがいない。

と述べている。この指摘が、説得力を持つてくるのである。

緑雨もまた、海を越えて発生していたある種の「ダンディー」であつた。内田魯庵は、緑雨のことを次のように書き残している。¹⁴

こんな長屋に親の厄介となつていたのでから無論気楽な身の上では無かつたらうが、外出ける時はイツデモ常綺羅の斜子の紋付きに一葉の小袖というゾロリとした服装をしていた。尤も一枚こつきりの所謂常上着の晴着なしであつたらうが左に右くりウとした服装で、看板法被に篆書崩しの斎の字の付いたお抱へ然たる俵を乗廻し、何処へ行つても必ず俵を待たして置いた。例へば私の下宿に一日遊んでる時でも、朝から夜を遅くまでも俵を待たして置いた。（略）恁んな馬鹿げた虚飾を張るに骨を折つてゐた。緑雨と一緒に歩いたことも度々あつたが、緑雨は何時でもリウとした黒紋付で跡から俵がお伴をして来ると

いう勢ひだから、精々が米琉の羽織に鉄欄の眼鏡の風采頗る揚らぬ私の如きは怎うしてもお伴の書生ぐらいにしか見えなかつたであらう。

緑雨は虚飾家と云へば虚飾家だが黒斜子の紋付きを着て抱へ俵を乗廻してゐた時代は貧乏咄をしてゐても氣品を重んじてゐた。下司な所為は決して做なかつた。何処の家の物でなければ喰へないなど、贅を云つてゐた代りには通人を氣取ると同時に紳士を任じてゐた。

こういつた魯庵の言葉からは、服装や俵、また、食といつたものに対して並々ならぬ美意識を貫き、「紳士を任じて」いた緑雨の姿が浮かび上がる。

「ダンディー」は、都会に暮らし、身なりや食といつたものに強い「美意識」を持ち、「女嫌い」で、「結婚」を否定し「独身主義」を通す。文学作品における評価は、例外を除いては今一つで、生き方そのものに強いインパクトがある。公序良俗や良妻賢母という「道徳」の仮面を剥がし、本当の人間の恋や性を露わにする。そして、「自己の美意識」を貫き、「失われていくもの」を胸に抱いて、時代との軋轢の中に生きるのである。こういつたものが一九世紀ヨーロッパに登場した「ダンディズム」であつたら、右のような緑雨のあり方もまた、その一種といつてよいのではないだろうか。

山田勝¹⁷氏は、このような西洋の「ダンディズム」を、一つの個人主義と見て、ロマンティシズムの発生と同時期に発生した「ロマンティシズムの変型様式」、「反ロマン主義としてのロマン主義」であると位置付ける。そしてまた、氏は、「ダンディズム」の特徴を次のように述べている。

そもそもダンディー発祥の根源的要因は、ブルジョワの台頭、崩壊しつつある貴族趣味、そして平等主義にあつたことはすでに述べた。こうした時代の流れに対して、空虚とも思える姿勢で、反抗の演技を繰り広げたのがダンディーであるとすれば、ダンディーの基本精神は「反逆」にあることは自明である。しかしここで誤解してはならないのは、彼らには政治的イデオロギーは絶対がないということである。革命にしろ、労働運動にしろ、デモにしろ、反逆の要素はある。しかしダンディーの反逆は決して政治的色彩を帯びることはない。(略)ダンディーの反逆は、従つて、体制への反逆ではなく、時代の流れとともに定着しつつある生活様式の卑属性への反逆である。つまり社会の風潮への反逆と言つていい。

「ダンディズム」は、時代に対する一つの抵抗であつた。緑雨もまた、没落士族の矜持を抱き、明治社会への「反逆」を表し続けたのではなかつただろうか。江戸に生まれたわけでもない緑雨が、殊更に江戸っ子を氣取つたのも、その「ダンディズム」のなせる技で

あつたのだらう。¹⁸⁾

だが、緑雨のアフォリズムに見られる軽妙な皮肉や嘲笑は、やがて、時代が国家主義へと傾斜し、日清戦争から日露戦争へと向かうなかで、次のような言葉を含み持っていく。

○ 泰山は土壤をゆづらず、されば小論客あり、小策士あり、小銀行あり、小雑誌あり、剩さへ小勤工場ありて、これらの相集合し、抱合し、化合せるものを、大日本国と称するなり。富嶽は、屹然雲表に秀て、千秋ゆるがぬ御世の姿を、世界に誇示せり、写真に誇示せり。

○ 日本は武士国なりき。刃を避けざる武士の勇気を以て、人類一般の勇気を誤解せる国なりき。有識なるべき人の論評にも、今猶この傾向を存す。武士国は野蛮国也、武士国の勇気は野蛮国の勇気也。

〔大底小底〕明三六・五―七
緑雨のアフォリズムは、日清戦争後、国家主義化し日露戦争へと突き進んでいく時代と、格闘する姿勢を見せていくのである。そしてそれは、やがて「撃石火」を写こうとする秋水に、アフォリズムの持つ一つの可能性を示唆することになったのかもしれない。

この緑雨の時代と格闘する姿勢は、以前にも論じたように、アフォリズム以外の言葉も含めてこの時期の緑雨の言葉を辿ってみれば、一つの底流として捉えられるものである。その一例を挙げておく。

明治三十三年一月、劇場取締規則が警視庁から改正発布され、その

第三條において「勸善懲惡の主旨に背戾する」演劇は「興行することを得ず」と定められる。このことについて、緑雨は、翌三四年一月、大野酒竹に宛てた書簡で、批評家が「一同団結して社会に對抗する」事を訴えるのである。

また緑雨は、日露戦争の開戦直後、明治三七年二月一五日付の幸徳秋水宛書簡の中で、「急ニ僕モ非戦論ヲモ書キタクナツタ」と書き、戦争に自ら喜んで参加していく「兵士其人ノ謬想」から「論サネバ」ならないと、独自の視点から秋水に助言している。この書簡の内容は、秋水が書いたとされる、六日後の二二日付「平民新聞」論説「兵士の謬想」にはそのまま引用されているのであり、緑雨と秋水が「非戦」という態度において共鳴していたこと、緑雨の言葉が秋水の「非戦論」に強い影響を及ぼしていたことが伺えるのである。

だが、こういった緑雨の、時代に対する「抵抗」の姿勢は、秋水のような政治的イデオロギーによるものとは、やはり一線を画するものである。それは、緑雨が一人の個人として自由に書き、振る舞おうとする中で、それを阻止しようとしてくる時代の問題とぶつかり、格闘する姿だったと言わなければならない。

おわりに

斎藤緑雨の女性憎悪のアフォリズムには、西洋の女性憎悪のアフ

オリズムが入り込んでいる。

緑雨の女性憎悪は、これまで、緑雨自身の女性不信や女性恐怖の表れと見られることが多かった。以前私は、緑雨の女性憎悪には、逆説的に、緑雨の意外に純粋な「恋」への憧れと、それがこの世においてかなわぬ事であることを感じる「闇」があったのではなかったかと述べたことがある。そして、緑雨の女性憎悪と呼ばれてきたものは、女性の中にある「魔」を描こうとした故のものだったのではないかと述べ、樋口一葉の文学との共鳴を見たことがある。²⁰

こういった緑雨の資質に、西洋の女性憎悪のアフォリズムが呼応して、独自の世界を作らしめていったのである。そこには、バイロン、バルザック、スタンダール、ミュッセとといった、一九世紀西洋で流行した「ダンディズム」に関わり、そしてまた、新たな人間像を模索した者たちの言葉が、間接的にはあるが流れ込んでいるのである。

緑雨にそれをもたらしたのは、兆民、秋水、鷗外らによる翻訳であつた。明治二〇年代には、西洋のアフォリズムが多く翻訳され、ある可能性を予感させた時期があつたのであり、緑雨のアフォリズムは、そういった土壌の中から生まれてきたものでもあると言える。

また、緑雨は作家としての出発期に「自由燈」に入社し、坂崎紫瀾の下で働いていたのだが、ここで再び、兆民、秋水という自由民権運動の潮流に接触している。

ことに注目しておきたいのは、緑雨と秋水との関係である。両者の交友は、日常的次元のみならず、社会的、思想的側面にも及ぶが、さらに、アフォリズムという文芸的側面の交流にも及んでいるのである。両者は、共にアフォリズムを書きつつ、同じ時代を併走してもいたのである。

だが、秋水が一つのイデオロギーへと傾倒し、直接的な政治行動へと進んでいくのに対して、また、鷗外の女性憎悪のアフォリズムの翻訳が、「滑稽小説」の模案の中でなされたのに対して、緑雨は、アフォリズムという形式にとどまり続ける。

そして、その軽快な皮肉や嘲笑の中に、徒党を組むことなく一人屹然と自己の美意識を貫き、時代を風刺、批評し続け、その歩みの途上において、国家権力による表現規制に対する抵抗や、日露戦争への「非戦」の態度に至つた、緑雨の孤高な「ダンディズム」を見ることが出来るのである。

斎藤緑雨とは、坂崎紫瀾、中江兆民、幸徳秋水といった自由民権運動の流れに接触しながら、北村透谷、樋口一葉と同時代を生き、明治のロマンチズムの空気を呼吸しつつ、もう一つの道を歩んでいた、ある種の徹底した個人主義者ではなかったか。そしてこの国家と対峙するほど強烈な個人主義こそ、明治という時代の中で、西洋アフォリズムと交差しつつ、緑雨が、独自に切り開いていったものではなかっただろうか。

注

- (1) 「緑雨のアフォリズム—Causes V.—」(『新潮』第七二巻五号—一九七五・五)
- (2) 拙論「緑雨と秋水—それぞれの『非戦論』—」(『国文学攷』第一八四号—二〇〇四・一一)
- (3) 野口武彦氏は、「斎藤緑雨—明治シニシズムの運命—」(『中央公論』第八四巻二号—一九六九・一二)で、「緑雨は女がきらいだった。あるいはむしろ、きらいでありながら滴更必要でないこともないこの対象に、そうであるがゆえにひとしおの嫌悪を感じていたといふべきだろうか。」と述べ、緑雨文学に「反フェミニズムの主題」を見る。
- (4) この他にも、これまで専ら緑雨自身の女性憎悪に還元されてきた、男性を経済的に苦しめるものという女性像や、結婚に対する嘲笑や否定もまた、兆民訳「情海」や秋水訳「情海一瀾」に見られる。緑雨のアフォリズムに見られる女性や結婚に関わる言葉は、西洋アフォリズムとの接触の中から生まれてきたものでもある。
- (5) 緑雨が発禁処分を受けた後、社主の黒岩派香は緑雨の「萬朝報」退社を秋水から言わせている。緑雨が秋水の説得に応じた背景には、こういった事情もあったと考えられる。
- (6) 『世界文学事典』「ミソギユニア」(二〇〇二・二集英社)
- (7) イギリスでは一八五七年、フランスでは一八八四年に離婚法が成立している。川本静子氏は、「新しい女たち」の世紀末(一九九九・四みすず書房)で、「イギリス・フェミニズムの運動は、やがて高等教育の拡大・選挙権の獲得・道徳におけるダブル・スタンダードの見直しへとめざましい開いを展開していく」と述べ、「新しい女」とは「魔性の女」であり、「ハーディーをはじめとする世紀末の男性作家たちは、性的情熱に人間行動の支配原理を見いだし、肉体を具えた女の生と性の営みの追求を突破

口」に、「閉塞状況からの活路を求めたと論じている。

- (8) 『世界文学事典』「ミソギユニア」(前出)で、木村健治氏は、「古代ギリシャ・ローマ文学にミソギユニアが目立つとすれば、二つがらの理由が考えられるだろう。一つは、詩人自身の同性愛的な傾向という、個人の資質に還元できる理由。もう一つは、特に風刺詩のような場合、最も安全な風刺対象は女性であったという理由。これは古代社会における女性の地位という社会的な問題に還元できる理由である。」と述べている。
- (9) 『平民新聞』第一号(明三六・一一・一五)と第六四号(明三八・一一・二九)、最後の掲載分のみ「直言」(明三八・九・二〇)に連載している。
- (10) 拙論「日清戦争後の緑雨—国家主義化への抵抗—」(『近代文学試論』第四二号—二〇〇四・一一)
- (11) 中野三敏氏は、「緑雨警語」「解題」(一九九一・七富士房)で、鵜外の「ラブルユエールが箴言数則」、「毒舌」を挙げ、「前者は(略)主として批評家、もしくは読書に関する皮肉の類を抜き出したもの。後者はジョルジュ・サンド、ボーマルシェ、ルソー、バルザック等の、女性もしくは恋愛に関する辛口の評語を列挙する。(略)批評家論、読書論、女性論、恋愛論とくれば、いずれもわが緑雨警語にあっても常連と言ふべきもの、緑雨をして、洋人何するものぞと奮い立たせるものが無かったとは言い切れまい。」と述べている。氏はまた、ピアス『悪魔の辞典』の内容が、「鵜外の耳目を通して」、「緑雨にまで届いていたかもしれぬ。」と指摘している。
- (12) 国立国会図書館編『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』(一九五九・丸風閣書房)
- (13) 河盛好藏氏は前出論文で、緑雨の「人間不信は、ラ・ロシュフコーを思わせる。」と述べている。
- (14) 前出

(15) 『思い出す人々』(斎藤緑雨) (大一四・六春秋社)

(16) 山田勝氏の、『ダンテイズム 貴族趣味と近代文明批判』(一九八九・九日本放送出版協会)、及び『孤高のダンテイズム シャーロック・ホームズの世紀末』(一九九一・五早川書房)を参考にしている。

(17) 山田勝『ダンテイズム 貴族趣味と近代文明批判』(前出)

(18) 中野三敏氏は、「その内なる江戸」(『緑雨全集』「月報3」一九九〇・一)で「緑雨の拠り所が前期戯作にあった事は歴然としている。」「緑雨がその内なる江戸を中期の江戸に見定めていたらしいとわかれば、扱そこから何が見えてくるか。これから探るべき課題の一つであろう。」と述べている。

(19) 拙論「日清戦争後の緑雨―国家主義化への抵抗―」(前出)

(20) 拙論「斎藤緑雨の『恋』と『蘭』―恋愛神聖論から道徳回帰への時代の中で―」(『近代文学試論』第四〇号二〇〇二・一二)

〔付記〕

テキストの引用は、『斎藤緑雨全集』(一九九〇・六筑摩書房)、『中江兆民全集』(一九八三・二岩波書店)、『幸徳秋水全集』(一九八二・四日本図書センター)、『鷗外全集』(一九七二・二岩波書店)による。但し、原則として漢字は新字体に改め、ルビは省いた。

また、小稿は、二〇〇五年一月五日に開催された第二八回北村透谷研究会全国大会(於鈴鹿市)での発表をもとにしている。

―つかもと・あきこ、和歌山工業高等専門学校校助教授―